

ジャン・バニエの手紙

2010年1月、トロリーにて

親愛なる友人の皆さまへ、

私は、このクリスマス・シーズンが好きです。

神が肉となられます。神は私たちに愛することを教えるために、そして苦しんでいる人たちや困っている人たちに心を開くことを教えるために、小さくなられます。

もちろん、神は私たちの世界におられますが、私たちが静かに神の方に心に向け、そして助けてくれるよう神を呼び求めるのを待っておられます。

ヨハネの黙示録（3章20節）では、私たちは、神が戸口に立って、たたいておられる箇所を朗読します。戸口をたたく音を聞き、その扉を開くならば、神は入って来られ、ともに食事をされるのです。聖書学的な意味で申し上げるならば、他のだれかといっしょに食事をするというのは、その人たちと友だちになるということなのです。

神は私たちを、ご自分の友人にしたいと望んでおられます。

しかし、自由のない愛や友情はあり得ません。もし私たちが神に背を向けたとしても、それでも神は、私たちが神に対して戸口の扉を開けるのを待っておられます。

共感の神は、私たちの知性、知恵、能力そして心を通り抜けることなく、この世界でご自分の共感を行使することはできません。

神は暴力の神ではなく、むしろ招く神であり、皆に対して与える愛をもって、待ってくださる神なのです。

私たちを愛してくださる優しさの神は、私たちが重要であり、貴い存在であることを、私たち一人ひとりにあらわしたいと願っておられます。

しばしば私たちは、自分がすごいこと、立派なことをするから重要な人物だと信じ込んでいます。そして私たちは、強くて、勇ましく、有能でなければならず、また自分がいかに能力があるかを示さなければなりません。

私たちの共感の神は、とても奥深いところで、私たちの弱さのうちに、傷つきやすさ、そして小ささのうちに私たちを愛して下さいます。

私たちの神は、ご自分の腕を広げて私たちを受け入れてくださり、そして「私はありのままのあなたがたを愛していますよ」と言っておられます。神が私たちを立ち上がらせて下さいますので、私たちは皆、神の正義と平和と愛の道具となることができます。

私は小さな十一歳の男の子の話をするのが好きです。その男の子には重度の知的障がいがあり、お母さんは、その息子ことで嘆き悲しんでいました。その息子が母親に言いました。「お母さん、心配しないで。イエスさまはこの僕をありのままに愛しているんだから」。この小さな少年は、他の人たちがなっていて欲しいと願うものになる必要がありませんでした。

彼は、単純に自分が自分であることができ、そしてイエスの愛に応えることができたのです。

最近、益々、愛するとは、他者をありのままに受け入れること — いろいろ異なりますが、彼らもそれなりの人間であって、神の子でありますので、尊敬の念をもって受け入れることだと、私は悟っています。

他者も、それぞれ自分の賜物、傷つきやすさ、とりえ、そしてもちろん、こわれやすさをも持ち合わせています。

私たちが他者を受け入れることで、私たちは彼らを自由にします。

そうすることで彼らも自分自身でいることができるのです。

私は非暴力的コミュニケーションというか、とても敬愛的コミュニケーションに魅力を感じています。このようなコミュニケーションには、他者に耳を傾けるということが関係しています。これは、他者よりも自分たちのほうがもっと知っているとか、自分たちのほうが正しくて他者は間違っているといったような優位性を示すためではなく、むしろ他者とコミュニケーションを始めることなのです。

コミュニケーションは、一方が他方を食べてしまう吸収合併ではなく、むしろ相手に対し自由を与え、立ち上がらせることによって他方が完全に自分自身になれるのです。

この敬愛的コミュニケーションは、謙遜に基づいています。

聖パウロがヨーロッパのフィリピで、最初のキリスト教共同体へ手紙を書き送りましたが、その中で次のように言っています。

「互いに相手を自分よりも優れた者と考えなさい」（フィリピの信徒への手紙2章3節）

私はコンスタンチノーブル総主教アテナゴラスの次の言葉が好きです。

*「私は長い間、自分自身との戦いに労力を費やして参りました。
それはひどいものでした。しかし今や、私は武装を解除してしまいました。
正しくなければならないという必要性の鎧兜も、また他者を貶めることによって自分自身を正当化する必要性の鎧兜も、私は脱ぎ捨ててしまいました。
もはや私は、自分の豊かさにしがみついて守りの立場に立つ人間ではありません。」*

「私たちが、自己という鎧兜を脱ぎ去り、自己に執着しなくなり、もし私たちが、すべてを新たにしてくださるキリストに心を開くならば、キリストは過去の傷を取り去ってくださり、どのようなことでも叶い能う新たな時が顕されるのです。」

私はこの文が好きなのですが、私は自分のほうが優れていることを示す、あるいは他者を

低く見せようとするわなに、いとも簡単にはまってしまいます。

いつでしたかつい先頃、ラルシュ共同体で、一年生のアシスタントに対し、暴力に関するお話しをしていたときのことで、質問の時間のときでしたが、ひとりのアシスタントが私に強い調子で、次のように言いました。「私の考えは、あなたの考え方とは違います」と言ってから、彼女は自分が赦しということをどのように考えているか、説明しました。

この若い女性の話しを聞いていたときですが、私の心の中で自己防衛システムが立ち上がるのを感じました。そして私は彼女に言ってしまったのです。「あなたは私の言ったことがわかっていない。」その後すぐに私は、ハタと気づきました。私は自己弁護しており、まるで「あなたは間違っていますよ。あなたは私の言ったことを実際には聞いていなかったのですね」と言っているかのようだったと。

もし私が、もっと彼女に尊敬の念を払い、交わりの霊のうちに、彼女と本当に出会いたいと望んでいたとしたら、私はこのように言うべきでした。「おそらく、私がうまく説明してなかったのでしょうか」と。ここに、真の敬愛的コミュニケーションがあるのです。支配よりも交わりを大切にできるような人になるために、私はまだまだ努力しなければなりません。

いじめる人にも、いじめられる人にもならないようにしましょう。

他者をぶちのめすこともせず、他者からぶちのめされることもないように。

忠実でいること。他者のうちに、関係を結ぶのが困難な、だれか重要な人物を見るように努めましょう。他者のうちにある防御の壁を取り払う手伝いができるよう、尊敬と愛をもって行動しましょう。そして自分自身の壁を取り払うように努力しましょう。

否定的な面に目を留めるよりも、他者のうちにすべての肯定的な面、すばらしいことに目を留めるようにしましょう。

そういったことが、私たちが預言者的になることを、また他者をびっくりさせるようなことを言うのを、妨げることはありません。重要なことは、私たちがお互いに真理を生きることです。私たちが人を愛して忠実でいると、私たちは平和の道を造ることになります。

神が肉となられたことで、私たちはおそれることなく、また私たちがいかに優れているかを示す必要もなくなりました。小さくなられた神は私たちに、貧しく、そして小さな者となるように呼びかけておられます。私たちを受け入れるために来られる神は、貧しい人たちを受け入れるよう私たちに呼びかけておられます。

私は、タゴールによって造られたこの神への祈りが好きです。

ここにあなたの足載せ台がありますから、どうぞあなたの足を休めてください。
そこは、もっとも貧しい人、もっとも卑しい人、そして置き去りにされた人たち

の住むところです。

私があなたに頭を下げようと努力しても、私のおじぎは、
もっとも貧しい人、もっとも卑しい人、そして置き去りにされた人たちの間で
あなたが足を休めておられる深さまでは、届きません。

もっとも貧しい人、もっとも卑しい人、そして置き去りにされた人たちの間で
謙遜という服を着てあなたが歩いておられるところには、
プライドは決して近づくことはできません。

もっとも貧しい人、もっとも卑しい人、そして置き去りにされた人たちの間で
寄り添う人もいない人たちに、あなたが寄り添い続けている場所へとつながる
道を、私は決して見つけることはできません。

他者を愛するとは、ありのままの彼らを受け入れることであり、そうすることで彼らもまた、他者を受け入れることができるのです。それがクリスマスです。そうするとクリスマスは毎日のことになります。私たちは小さな行いを通して、毎日、愛を示すことができます。共に心をひとつにして世界を変えること。子どものようになって、子どもになられた神を喜んで迎え入れること。

そうです、私はまだまだ自分自身で努力する必要があります。子どものようになるために、神のお恵みを私はまだまだ必要としています。

前回、皆さまに手紙を書いて以後、「障がい者のためのクリスチャン・サービス」 —
(障がいを持つ人たちとその家族のために、命と希望の泉となるように 1962 年マリーエレン・マチュー女子によって創設されたものです) — のすばらしい三日間がありました。このパリでの三日間は、命というものが、いかにこわれやすさから成長することができるかを、また、希望というものが、いかに苦しみの奥底から湧き上がって来るのかを示してくれた三日間でした。

最近私は、南西フランスのアジェンで、リトリートを開きました。百五十名の参加者があり、若者たちもいれば、若くない人たちもいました。主に南西のコニャック、ラ・メルシー、レ・サパン、ラ・レベルリー、アジェン、そして「信仰と光」の共同体からの参加者たちでした。ほかに、ポルドーやバヨンヌ、そしてトゥールーズで生まれた共同体の代表たちも含まれていました。それは、喜びと歌とお祝いと祈りと友情に満ちた週末でした。私たちの共同体の心は、私たちをひとつに結び合わせる、強い人と弱い人を結び合わせる、

強い人のなかにある弱いところと弱い人のなかにある強いところを結び合わせる、心と心
の関係なのです。私の心は、共同体に対する感謝の気持ちでいっぱいです。

そうなのです、私はラルシュにいて幸せに思いますし、私が望むことは、他の人たちが幸
せになるように、お役に立つことです。

ラルシュは組織構造の面では進化していますが、心は全く変わることなく同じです。

それは弱い人たちとの、愛のある本物の結び付きのうちにあるものです。

ジャン・クリストフェとクリスティーン、そして責任を担ってくれているすべての人に対
し、ラルシュを導いている彼らの知恵に対し、私は感謝いたします。

先週、トロリーのスピリチュアル・センター「ラ・フェルメ（農場という名の家）」で、パ
リから来た路上生活者のためのリトリートが開かれました。彼らは、彼らのために働いて
いる何人かの人たちに付き添われていました。いっしょにいて、とてもよかったです。最
後の日には、皆がいっしょになってお互いの足を洗い合いました。

とても寒かったので、心と体を暖かくしたこのリトリートは、とても喜ばれました。

彼らを受け入れることは、「ラ・フェルメ」にとって、大いなる喜びでした。

私にお便りをくださった皆さまお一人おひとりに感謝いたします。どうかこの手紙でご容
赦ください。この新年を迎えるにあたり、皆さまとの交わりのうちにいられることの喜び、
そして貧しく、小さくなってくださることで私たちが神を恐れず、神から流れ出る愛を受
け入れることができるようになった、そのような神との交わりのうちにいられることの喜
びを皆さまに申し上げたいと思います。

ご多幸を祈りつつ

ジャン・バニエ